HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語の心的動詞をめぐって(2)
Author(s)	最上, 英明
Citation	独語独文学科研究年報, 16, 41-51
Issue Date	1990-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25799
Type	bulletin (article)
File Information	16_P41-51.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ドイツ語の心的動詞をめぐって（2）

最 上 英 明

0．はじめに

人間の基本的な感覚知覚を表現する知覚動詞（Wahrnehmungsverben）と、より内面的な心理感情を表現する感情動詞（Gefühlsverben)をまとめて心的動詞（psychische Verben)と呼ぶことにする。心的動詞ではこうした意味的な区分も出来るが、統語的な側面からも区別される。 sehenや hören のような知覚動詞、及び lieben や hassen のような感情動詞では、知覚する主体である人間名詞が主語となる。これに対して知覚される対象である事柄や事物や抽象名詞を主語にとり、何らかの影響を受ける人間を目的語にとる心的動詞も存在する。この後者の心的動詞の方が統語的には独自のふるまいを示すことが多い。この小論の目的は、この種の心的動詞を考察の対象としてその特性の一端を解明することである。

1．感覚を表現する知覚動詞

知覚動詞には知覚する人間が主語に立つもの、知覚される対象が主語に立つものとがある。また知覚者が主語の場合には、知覚する対象に注意を向けるか向けないかの違いによって、能動的かつ意図的に対象を知覚するもの、単に受動的に知覚するもの[1]とに分かれる。視覚と聴覚についての例でこれらの３つのタイプの知覚動詞を挙げると次のようになる（括弧内は英語）。

(1)	受動的知覚	能動的知覚	知覚対象が主語
視覚	sehen (see)	ansehen (look at)	aussehen (look)
聴覚	hören (hear)	anhören (listen to)	klingen (sound)

sehen, hören という動詞は原形不定詞をとりうる知覚動詞として統語的にも重要な動詞であるが、ここでは知覚対象が主語になる３番目のタイプを考察の対象にして話を進める。

人間の感覚という場合、感覚器官の違いに応じて視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚のいわゆる五感を指すのが一般的である。小泉(1989)での五感を表現する動詞の分類では、次のような英語の例文が挙げられている。

(2)a. The house looks empty.

b. The flute sounds clear

c. This lily smells sweet.

d. This dish tastes of garlic.

e. The paper feels rough. (小泉 1989: 76f.)

これに対応するドイツ語表現が (3)である。(2e)の英語の feel に対応するドイツ語 fühlen には、事物を主語とする用法がないので、その代わりに (4)のような再帰動詞による表現が用いられる[2)]。この種の再帰動詞による表現は触覚の他に視覚、聴覚でも可能である。

(3)a. Das Haus sieht leer aus.

b. Die Flöte klingt klar.

c. Die Lilie riecht süß.

d. Das Gericht schmeckt nach Knoblauch.

e. ? ? ?

(4) Das Papier fühlt sich rauh an.

(5)a. Das Haus sieht sich leer an.

b. Die Flöte hört sich klar an.

ここで五感表現に対応するドイツ語動詞の代表例を整理すると、次のようになると思われる。

(6)

	自動詞	再帰動詞
視覚	aussehen	sich ansehen
聴覚	klingen	sich anhören
嗅覚	riechen	×
味覚	schmecken	×
触覚	×	sich anfühlen

この中では視覚と聴覚が一番高次の感覚とみなされ、近年の認知心理学研究でも、情報処理の立場からこの２つが中心に扱われていることは周知の通りである。嗅覚と味覚は相場(1982)でのように化学的感覚という名称でまとめて呼ばれることもあり、Leisi(1975) でも特に一群を形成する状態動詞として言及されている。 Gerling/Orthen(1979) の状態動詞の分類でも、嗅覚と味覚の動詞は

brennen などとともに化学的な状態を表現する動詞（chemische Zustandsverben）として扱われている。嗅覚や味覚の刺激が一種の化学作用と類似していると解釈されるからであろうか。brennen に関しては、次のような比喩的な知覚表現も例示されている。

(7) Pfeffer brennt auf der Zunge. (Gerling/Orthen 1979: 156)

嗅覚に関しては、Gerling/Orthen(1979)で臭いの種類により３つのレヴェルが示されている。

(8) positiv : duften （香る）
neutral : riechen （匂いがする）
negativ : stinken （悪臭がする） (ebd. 62)

(9)a. Die Rose duftet.
b. Gas riecht.
c. Faule Eier stinken.

嗅覚までの感覚ではまだ対象とそれを知覚受容する人間との直接的な接触はないが、味覚では対象と人間との直接的な接触が生じる。触覚は一番分化していない感覚で、もっとも低次の原初的感覚とされる。宮城(1979)によれば、視覚、聴覚、嗅覚、味覚の高次の感覚が sensorisch と呼ばれるのに対し、触覚だけ sensibel と呼ばれて区別されるという。直観的に考えても触覚だけは曖昧な感覚のように思われる。相場(1982)では触覚は体性感覚と呼ばれ、さらにこの体性感覚は皮膚感覚と深部感覚とに分けられる。皮膚感覚は通常の触覚を含み、触・圧覚、振動覚、温・冷覚を指し、深部感覚は筋、筋膜、腱、関節などの深部組織に基づく感覚だという。肉体の痛みも含めた広義の感覚として触覚を考えておくことにする。

さて一般に知覚対象を主語とする五感表現の動詞では、知覚する人間は (3)での例のように明示されないことが多いとはいえ、深層では３格の人間名詞の存在が想定される(通常は mirなので、言われないことが多いと思われる）。しかし痛みや痒みの体性感覚の表現では、人間名詞は３格での表現が一般的であるものの、４格での表現も可能となる場合がある。

(10)a. Mir/mich schmerzt die Wunde.
b. Mir/mich juckt die Wunde. (Wegener 1985: 167)

同じ痛みでも感覚としての肉体的な痛みではなく、より内面的で心理的な感情としての痛みでは、

人間名詞は４格での表現しか許容されなくなる。

(11) Mich / *mir schmerzt sein Anblick. (ebd. 179)

事柄や事態を主語として人間の感情や心理を表現する感情動詞では、感情を誘発される人間は４格目的語となるのがほとんどである。主語が使役的な動作主としての性格と持つからであろう。

(12)a. Nichts zu verstehen ärgert mich.

b. begeistern, freuen, entrüsten, entwaffnen, erschrecken, erzürnen, ermutigen, knechten, beeindrucken, erheitern, quälen, belasten (Eisenberg ²1989: 376)

こうした事実から、体性感覚を表現する心的動詞は一般的な知覚動詞と感情動詞の中間に位置するもののように思われる。この観察が正しければ、動詞を統語論と意味論との関連で研究する上でも興味深い事実であろう。なお Postal(1971) の英語の心的動詞の分類で、知覚動詞（知覚的述語）と感情動詞（心理的述語）の他に、その中間的なものと考えられる体性感覚の動詞（感覚的述語）とに分けているのは、今指摘した観点からも妥当なもののように思われるし、英語でも意味的区別が統語的事実として反映しているものと考えられる。

(13)a. 知覚的述語 (perception predicate)

look, sound, smell, taste, feel...

b. 心理的述語 (psychological predicate)

amuse, bore, exite, frighten, surprise...

c. 感覚的述語 (sensation predicate)

ache, hurt, itch... (Postal 1971: 31ff.)

なおドイツ語で３格の人間名詞をとる心的動詞としては、知覚動詞以外に主語に不定詞句も立つ次のような少数の動詞のあることも触れておかねばなるまい。

(14)a. Viel zu reden widerstrebt ihr.

b. gefallen, fehlen, imponieren, wehtun, behagen, bekommen, einfallen, liegen, glücken, genügen, schwerfallen, zustehen (Eisenberg ²1989: 376)

心的動詞が目的語として３格をとるか４格をとるかは、それぞれの動詞の語彙的特性に基づく微妙な問題であるが、まだまだ解明すべき点も多いように思われる。

２．心理状態を表現する感情動詞

ここでも lieben, fürchten のような人間を主語にとり主体的な感情を表現する動詞ではなく、出来事や事物や抽象名詞を主語とし、そこから何らかの心理的な影響を受ける人間を４格目的語にとる動詞を考察する。次の (15a)のような文がその典型的なものであるが、(15b) のように心理的作用を受ける人間を主語とする受動表現も好んで用いられるのがこの種の感情動詞の特徴である。

(15)a. Wirre Gedanken erschütterten oft mein Hirn. (Alma Mahler-Werfel, *Mein Leben* : 31)
b. Als das furchtbare Erdbebenunglück in San Francisco geschah, waren Gustav Mahler und ich tief erschüttert,... (ebd. 46)

同じ心的動詞でも４格目的語をとる感情動詞がこのように受動表現を許容するのに対し、３格目的語をとる心的動詞は受動化出来ない。３格の目的語にとる自動詞は、主語が行為の動作主の機能を持つ場合は受動表現が可能であるが、動作主以外の機能を持つ成分が主語に立つ動詞 (schmecken などの五感を表現する知覚動詞や gefallen, imponieren などの少数の心的動詞) では受動表現が不可能である。

(16)a. Dem Mann kann (von den Feuerwehr) geholfen werden.
b.*Dem Mann kann (von dem Bild) gefallen werden. (Lenerz 1977: 115)
(17)a. Dieser Vorschlag gefällt ihm.
b.*Ihm wird von diesem Vorschlag gefallen. (Eisenberg ²1989: 301)
(18)a.*jm. wird geschmeckt.
b.*jm. wird geglückt. (Brinker 1971: 66)
(19)a. Ich wurde durch den Plan sehr beeindruckt/erschreckt/überrrascht.
b.*?Mir wurde durch den Plan imponiert. (Wegener 1986: 213)

心的動詞でも他動詞として４格目的語を必須にとる感情動詞の場合は、既に見たように受動表現が可能であるが、通常の受動文とは異なる独自の特性も見られる。例えば begeistern のような感情動詞の受動態では、状態受動による表現は可能でも動作受動による表現は不可能という現象が見られることがある。

(20)a. Der Onkel war von Mimi begeistert.

b.*Der Onkel wurde von Mimi begeistert. (Litvinov/Nedjalkov 1988: 167)

(21)a. Ich war von dieser Ski-Abfahrt begeistert.

b.*Ich wurde von dieser Ski-Abfahrt begeistert. (Lenerz 1977: 115)

これは感情動詞は過去分詞化されると形容詞としての性格を持つようになるからだと考えられる。この点は次のような文の対比からも理解できよう。

(22)a. Ich war sehr überrascht über Ottos Erfolg.

b. Ich war sehr froh über Ottos Erfolg. (König 1971: 164)

(22a) では前置詞句が過去分詞の後に来ていること、過去分詞が sehr のような副詞で修飾されていること、受動表現では必ずしも一般的ではない über が前置詞となっていることなどの要因から、形容詞的性格を強めていると考えられる。次の(23)のように同じ動詞でも２つの異なった前置詞を許容するものもある。(23b)の方が前置詞の選択と語順の点から、過去分詞が形容詞的性格を強めているといえる。通常は受動の過去分詞は文末に来るのが普通だからである。

(23)a. Er ist von allen enttäuscht.

b. Er ist enttäuscht über die Situation. (Schoenthal 1976: 105)

このように過去分詞が形容詞としての性格を強めるということは、文全体が受動態としての性格を弱めているということである。次の (24a)のように何らかの事柄や対象を主語とし、それによって何らかの心理的な作用を受ける人間を４格目的語としてとる感情動詞では、逆に人間を主語として表現する方法の必要性も生じてこよう。そのための表現手段として用いられるのが、(24b)の受動化と (24c)の再帰動詞化である[3)]。

(24)a. Diese Ehrung erfreut mich sehr.

b. Über diese Ehrung bin ich sehr erfreut.

c. Über diese Ehrung freue ich mich sehr.

d. Über diese Ehrung bin ich sehr froh.

これらは基本的にはいずれも (24d)の形容詞の構文と同義である。(22b)のような状態受動表現も人間の心的状態を人間中心に述べる単なる一つの表現手段として、もはや受動態であることを意識せずに用いられるようになっているものと思われる。感情動詞の過去分詞は一般の形容詞と同義であるものが多いのも、過去分詞として意識されることが低い原因であろう。

(25) aufgebracht - böse, wütend; befriedigt - zufrieden
beruhigt - ruhig; erzürnt - zornig
erfreut - froh; verägert - ärgerlich (Litvinov/Nedjalkov 1988: 71)

また (24c)のように他動詞から使役性を失って再帰動詞になったものには、感情を表現するものも多く含まれているのも興味深い。

(26) sich ärgern, sich aufregen, sich ekeln, sich entsetzen, sich freuen, sich wundern

以上の点から、感情表現における状態受動表現、再帰動詞表現、形容詞表現の語彙的及び機能的な類似性が見てとれよう。なお(24b) のような状態受動での表現は Litvinov/Nedjalkov(1988) では emotives Resultativ とも呼ばれ、同種の表現がよく用いられる心的動詞の例が挙げられている。

(27) aufgebracht, aufgemuntert, aufgeregt, aufgerührt, bedrückt, beeindruckt, befriedigt, begeistert, beleidigt, beruhigt, berührt, betäubt, geblendet, entmutigt, entrüstet, entsetzt, enttäuscht, entzückt, empört, gekräkt, gerührt, überrascht, überreizt, verärgert, verblüfft, verdrossen, verletzt, verschüchtert, versöhnt, verstimmt, verwirrt, verwundert (Litvinov/Nedjalkov 1988: 70)

emotives Resultativ という用語は、例えば(24)での例では、(24a) の出来事により帰結する結果の状態を(24b) が表現しているという考え方による。

König(1971) では(24b) のような表現は疑似受動(Pseudo-Passiv) と呼ばれ、選択する前置詞のタイプに応じて以下のような区分がなされている。

(28)a. über タイプ

belustigen, empören, entsetzen, erschrecken, beunruhigen, erzürnen, erfreuen, erstaunen, erschüttern, überraschen, verblüffen, verärgern

b. vonタイプ

begeistern, faszinieren, anwidern, anekeln, beeindrucken, überwältigen, bezaubern, verwirren

c. wegenタイプ

betrübt, bedrückt, verbittert, aufgeregt (König 1971: 164ff.)

それぞれの動詞がどの前置詞を要求するかという問題は、それぞれの動詞の語彙的特性に帰するとされることが多いが、 über が多用される点は注目される。Brinker(1971) が状態受動で über を前置詞としてとる例として挙げている文と動詞は以下のものである。

(29)a. "Ich bin erschüttert über das Unglück, das in meinem Haus geschah" sagte er, ...

b. Später mußte ich ... , worüber er erstaunt war, seine Geschichtsdarstellung etwas in Ordnung bringen.

c. Eine Anzahl der Leute, die sich als Konkurrenten von Hitler gefühlt hatten, waren über das, was dann geschah, nicht nur erschüttert, sondern zum Teil entsetzt,...

(Brinker 1971: 87)

(30) enttäuschen, verwirren, erschüttern, erstaunen, entsetzen, begeistern, beruhigen, betrüben, überraschen, erleichtern (ebd. 88)

Brinker(1971) では特に言及はなされていないが、示された例がいずれも人間の心理状態を表わす感情動詞である点は重要である。感情表現と前置詞 über との間の結び付きの強さが認められる。英語で感情的反応を示す対象に対して用いられる at や aboutなどのような前置詞と対応するものと思われる。どちらの言語でも過去分詞の形容詞としての機能を明白にする前置詞である。

次にこの über に見られる意味特性を検討してみる。König(1971) は (29b)の判断は方言により揺れがあるとしながらも、以下のような例で über の特性を示唆している。

(31)a. Ich war sehr erstaunt über die Tatsache/darüber, daß Otto schon wieder eine neue Freundin hatte.

b.*Ich war sehr angewidert von der Tatsache/davon, daß Otto schon wieder eine neue Freundin hatte. (König 1971: 165)

すなわち über には事実であることが前提とされた叙実的(factive) という特徴が見られるという。

同様の指摘は Breindl(1989)にも見られ、以下のような über をとる形容詞と過去分詞は、存在がしっかりと前提されたものに対する心理的反応を示すものとされる。

(32) ärgerlich, bekümmert, betrübt, erstaunt, froh, glücklich, traurig, verwundert
(Breindl 1989: 60)

人間の喜怒哀楽が既に生起した対象によって引き起こされると考えれば、妥当な指摘と思われる。心理的な影響を与える対象の存在が事実として前提とされることが必要だからである。

またこうした über による前置詞句が、一般の受動態でのような動作主としての性格を持ってはいないことは明白である。前置詞句の性格に関しては原因 (kausal) の意味役割を認めるのが妥当であろう。Breindl(1989) でも、 (33a)は (33b)のような原因の接続詞に導かれた副文に書き換えられることを根拠に同様の主張が見られる。

(33)a. Ich bin glücklich über dein Erscheinen.
b. Ich bin glücklich, weil du gekommen bist. (ebd. 60)

ここで感情動詞の能動文と受動文とを対比して、意味関係を考察してみる。まず (34a)は使役的な他動詞として一種の抽象的な行為を表現する文である。Koch(1979)の指摘にもあるように、主語の位置に立つ名詞は動作主(Agens) の意味役割を持ち、目的語の人間名詞は被動者(Patiens) の意味役割を持つ[4]。

(34)a. Diese Ehrung erfreut mich sehr. (=24a)
b. Über diese Ehrung bin ich sehr erfreut. (=24b)

これに対し (34b)のような状態受動表現では、行為や動作を表現する文ではなくなることにより、動作主の存在とは相容れない文になる。能動文では動作主だった主語名詞 diese Ehrung も、状態受動文では単なる場所(Locus) の前置詞句になってしまう。このような状態受動化による動作主の場所化が感情動詞の特性の一つであると思われる。ただし深層格ではどちらの文も diese Ehrung は起点格(Source)、経験者の mich/ich は目標格(Goal)とみなすべきものである。起点格には原因(Ursache) としての性格も持つものであるから、先の kausal としての分析とも整合する。

3．まとめ

この小論では、人間の身体全般の知覚や感情を表現する心的動詞の特性をいくつか考察してきた。表面的な感覚を表現する知覚動詞の分布、心理状態を表現する感情動詞の受動化に見られる特徴といった観点から検討してきた。ドイツ語の動詞の統語論的及び意味論的な研究を深める上で、今後こうした具体的用法に即した分析が極めて重要であるように思われる。

注

1) Leisi(1975) でも sehen, hören などの知覚動詞の文法的主語は受動であるとの指摘がある。また厳密には sehenに意図的知覚及び非意図的知覚の２つの意味用法を認めるのが妥当である。Koch(1979)では意図的知覚の場合の主語に動作主、非意図的知覚の場合の主語に場所としての意味役割を与えて区別している。

2) この種の再帰動詞による表現は藤縄(1987)による再帰動詞の機能的分類では、「感覚に関する属性表現」と呼ばれている。

3) これらの他に、自動詞としの表現も可能な感情動詞も一部ある。

Sie erschrack über seine Worte.

4) なおこの被動者(Patiens) を経験者(Experiencer) という言い方も格文法では一般的である。経験者と呼ぶ場合は、心理的影響を被る人物という見方でなく、心理的状態を経験する人物という視点からの見方になるように思われる。

参考文献

相場覚（編）. 1982.『知覚Ⅰ』現代基礎心理学第２巻. 東京（東大出版会）.

Breindl, E. 1989. Präpositionalobjekte und Präpositionalobjektsätzen im Deutschen. Tübingen.

Brinker, K. 1971. Das Passiv im heutigen Deutsch. München.

Eisenberg, P. 1976. Oberflächenstruktur und logische Struktur. Untersuchugen zur Syntax und Semantik des deutschen Prädikatadjektivs. Tübingen.

Eisenberg, P. [2]1989. Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.

藤縄真由美. 1987.「現代ドイツ語における再帰動詞の機能的分類」.『Der Keim』Nr.11. 65-77.

Gerling, M. und N. Orthen 1979. Deutsche Zustands- und Bewegungsverben. Tübingen.

Helbig, G und J. Buscha. [9]1986. Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leibzig.

Koch, W. 1979. Zur Semantik der psychologischen Verben. In: Pettersson, T.(ed.) Papers from the 5th Scandinavian Conference of Linguistics. Stockholm.

小泉保. 1989.「五感の動詞」. 月刊『言語』11月号.

König, E. 1971. Adjectival constructions in English and German. Heidelberg.

Leisi, E. 1975(1952). Der Wortinhalt. Heidelberg.

Lenerz, J. 1977. Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen. Tübingen.

Litvinov, V.P. und V.P. Nedjalkov. 1988. Resultativkonstruktionen im Deutschen. Tübingen.

宮城音弥（編）. 1979.『岩波心理学小辞典』. 東京（岩波書店）.

Postal, P. M. 1971. Cross-Over Phenomena. New York.

Schoenthal, G. 1976. Das Passiv in der deutschen Standardsprache. München.

Schröder, J. 1986. Lexikon deutscher Präpositionen. Leibzig.

Wegener, H. 1985. Der Dativ im heutigen Deutsch. Tübingen.

安井稔，秋山怜，中村捷. 1976.『形容詞』現代の英文法第７巻. 東京（研究社）.